

# 東大寺大仏殿内建地割板図について

## はじめに

二〇〇二年四月二〇日から七月七日まで、奈良国立博物館に於いて「大仏開眼一二五〇年 東大寺のすべて」展が開催された。このとき東大寺から博物館に、大仏殿内東壁南側に掲げられている巨大な板図の赤外線写真（朝山信郎氏撮影、図<sup>1</sup>）が提示され、展覧会における板図の展示紹介に関する相談があった。博物館から板図に関する解説の可能性を打診された神戸大学建築史研究室では、大仏殿内の板図の実地調査を行い、描き起こし作業を行った。その結果、縮尺一／二〇の巨大な板図は博物館での展示スペースの関係上縮尺一／八〇に縮小して「東大寺大仏殿 建地割図」（図<sup>2</sup>）として解説文<sup>1</sup>とともに同展覧会の会期半ばから奈良国立博物館に展示された。会期終了後、描き起こし図は東大寺大仏殿内に移され、解説文とともに現在も東壁に展示されている。

従来、大仏殿内のこの板図は大仏殿江戸再建における計画図と見られている。天沼俊一『日本建築史要<sup>2</sup>』では「天正創立の方広寺大仏殿は西面したる二重の仏殿で正面に唐破風をかけてあった。其形

は丁度今の奈良大仏殿の内部にかけてある元禄再建の計画図と同じ様である。」

「今の東大寺大仏殿と殆んど同じである。夫れよりは寧ろ今の東大寺大仏殿内に掲げてある元禄再建當時の計画図と全く同じといつていい位である。多分彼図は此れによつて作られたものであるう。」「次に立面図及び断面図をみると、外観は現今の東大寺大仏殿と同一（尤も正面のほうは十一間だから、今の大仏殿よりは形がい、事勿論である。丁度元禄に作った最初の計画図と同等である）で、殊に側面に於い

石田理恵  
黒田龍二

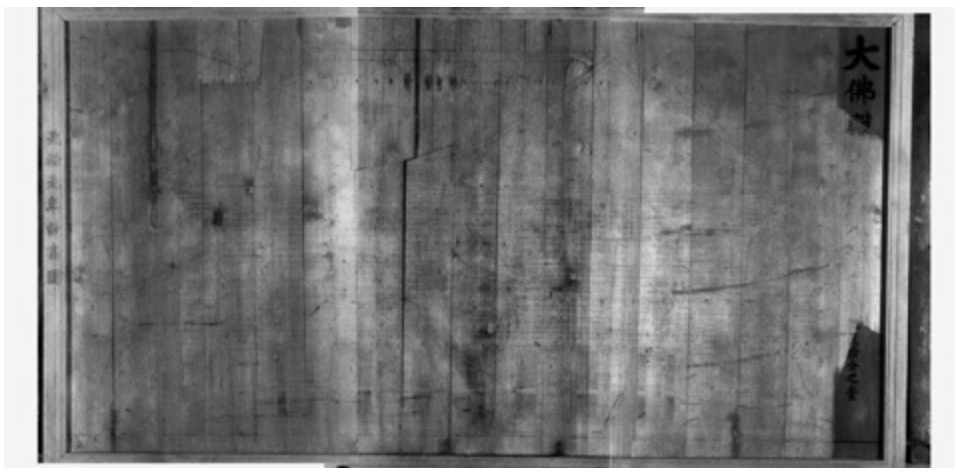


図1 東大寺大仏殿内に掲げられている板図の赤外線写真

てさうである。」と述べている。山本榮吾「東大寺大仏殿の規模」<sup>(3)</sup>に

は「いま大仏殿内の東面の壁面に掲げている桁行十一間に描いた正面側面図は、それがもとから額装に仕立てられていたようすなどよりして、この頃に大仏講が奉加を募るのに掲示した図と考える。」とある。『奈良六大寺大観』<sup>(4)</sup>は『諸伽藍略録』や『大仏殿再建記』あるいは現大仏殿に掲げてある図面などは当初計画を示すものであったことがわかる。」と記す。また、『東大寺金堂（大仏殿）修理工事報告書』<sup>(5)</sup>では「また同年（元禄元年）十二月九日には大工中井主水の設計によって大仏殿の再建計画図が出来た。この計画図はおそらく現在大仏殿内に額装して保存されている二〇分の一の縮尺で描かれた絵図にあたるものと思われるが、これには元禄元年計画図と表記して、天平、鎌倉と同規模の桁行十一間、梁間七間の堂が克明に描かれている。」としている。このように板図は様々な文献で記述されており、その存在自体は広く知られているにも関わらず、図面内容を知る手がかりとなる図は『東大寺金堂（大仏殿）修理工事報告書』所載の「文化九年の複製図」とされる図面のみであった。近代以降、板図の建築的内容を確認したのは恐らく今回が初めてであろう。調査の結果、大仏殿内の板図の内容は「文化九年の複製図」とは異なるものであることが明らかとなった。

東大寺大仏殿は創建時、また鎌倉再建時にその規模が一一×七間堂であって、江戸再建においても当初は一一×七間堂で計画されていた。しかし縮小を余儀なくされ、最終的に現在の七×七間堂になったことは広く知られている。江戸再建の経過については『大仏殿再建記』『愚子見記』などの史料がある。また東京都立中央図書館蔵の木子文庫堀内家文書には、再建当初計画から縮小に至る経過を示

す文書、図面共に豊富であり、これらに関しては平井聖氏の研究に詳しい。<sup>(6)</sup>一般に大仏殿内の板図は『東大寺年中行事記』の元禄元年十二月九日条に、

御大工中井主水、大仏殿ノ義肝煎不浅指図ニテ出来申ニ付寺中ヨリ  
為祝義、使僧玄隆ニ申付斗入壱荷書状相添差遣畢

という記述がみられ、その年紀が板図にかかっている「元禄元年計画図」と一致するため、元禄元年に中井主水によって作成された指図だろう、とされてきた。

しかし推定の当否がどうあれ、板図そのものの詳しい内容が知られていないことが根本的な問題である。本稿においては板図に描かれた内容を明らかにし、その上で現大仏殿及びその他の関連史料と比較するなどして、板図の性格を考察すると共に、東大寺大仏殿江戸再建に至る経過を検証することによって、同図の史的位置付けを行うことを目的とする。以下、この図を大仏殿内建地割板図と呼ぶことにする。

第一項には「大仏開眼一二五〇年 東大寺のすべて」展会期途中からの展示であったため、図録には収録されていない板図の解説文を再録し、第二項以下で調査結果を踏まえた考察を行う。

## 一、東大寺大仏殿内建地割板図

この図は、大仏殿の二〇分の一の図面で、縦板一七枚からなる巨大な画面に墨線で描かれている。現在は額装されて大仏殿内部の東壁に掛けられている。おそらく日本最大の板に描かれた建地割図（建築設計図のうち立面図、断面図）である。図は風食によって非常に

見にくくなっているが、赤外線写真などを使用して、描き起こすことができた。

### 額について

額縁は下枳幅一五・六cm、横枳幅一五・三cm、厚み七・五cmである。額縁は額板に比べて新しい材でできており、明治三六年から始まり大正二年に竣工した大仏殿明治修理のときに作られたものと推定される。額縁に書かれた「元禄元年計畫圖」も額縁作成時の筆であるから、これは直接に製作年代を示すわけではない。額板右端の題名の部分は上方と下方の板がおそらく額縁と同時期に修理されているが、文字は板に書かれた当初の文字と巧妙につながっており、始めから同じ位置に同じ文字があったと考えてよい。図の描かれた板は、節がなく、中空取り（板中央が渦状の板目、両脇が正目の木目となるように木取りした板）の檜の良材である。厚みは計測できないが、額縁との関係からは三・五cmほどの厚板で、表面は鉋掛けされ、実矧ぎ（接合部の片方を凹形、もう一方を凸形に作る）で召しあわされている。右から一〇、一一、一四枚目の上方が補修されているが、この墨線も風食により盛り上がっているもので、これらは現在の額装になるより以前に修理されたと見られる。

### 建地割図について

大仏殿は天平創建時および鎌倉再建時は桁行一間であった。江戸再建においても当初計画は桁行一間であったが、資金不足から七間に縮小された。現在の大仏殿の柱の配置は天平尺（天平尺一尺＝二九・七cm、江戸時代の曲尺一尺＝三〇・三cm）にあっているの

で、礎石はずっと残ってきたことが推定される。鎌倉再建大仏殿も創建時の礎石を使用したと考えられ、平面の大きさには変化がなかったといえる。

さて、この建地割図は桁行全長と梁行全長は創建大仏殿に一致するが、その間の柱位置が天平尺に従っていない。もし現在の大仏殿ができたあと、それを参照してこのような図を作ったのなら、天平尺に合うだろう。よってこの図は、全体規模は創建時に倣うということだけが決定した状態で、比較的自由に設計されたものと見られる。一方、この図と大仏殿との共通点も多い。現大仏殿は正面と側面の屋根勾配が異なる振れ隅という形であるが、それはこの図も同じであり、勾配自体も近似している。正面中央の唐破風もよく似ている。また、様式として天竺様（大仏様）を採用する点も共通するが、現大仏殿では内部に軒や天井を張り、屋根を支える梁などの架構を見せないのに対して、この図でうかがえるところでは、軒と内部の裳階部分には天井はないようである。これだけでも、現大仏殿よりダイナミックな架構をみせる建物であるといえる。

従って、この図は創建時と同じ十一間堂をつくる意気込みに燃えていたときに描かれた設計図であり、理想図であったと考えられる。その時期は貞享五年（一六八八 元禄元年と同じ）大仏殿新始めの頃が相応しい。よって、元禄元年の額縁銘も意味を持つことになる。

全体の形態は、天平創建時の規模を踏襲して桁行九間の本体の四周に裳階をめぐらし、天竺様（大仏様）を用い、屋根は寄棟造とする。この基本形は縮小されつつも現大仏殿に採用されている。つまり、現大仏殿はこの図から実施可能なものは採用し、手間を省かざるを得ないところは省いて完成にこぎつけたといえよう。



額の裏面はまだ未調査であり、製作の由来や伝来の経緯も今のところ不明ではあるが、東大寺大仏殿江戸再建の第一級資料といえるだろう。

## 二、調査概要と補足

今回描き起こした板図の調査は二〇〇二年六月四日に行った。実地調査に先立ち、まず赤外線写真をもとにして図面を描き起こしたが、描き起こすことができたのは大仏殿の大きな骨格のみであった。実地調査では桁行寸法、柱径、柱間、軒高、また組物、彫刻など、可能な限りを実測した。板図の墨線は風食により薄くなっているが、同時に風食によって墨線部分が盛り上がっているため、近づくとも図面を読み取ることができた。調査後、赤外線写真と調査結果を合わせて、再び板図の描き起こし作業を行った。なお、背面は未調査である。また、売店の上に足場板を渡しただけの不安定な状態で調査を行ったため、調査者の手の届く範囲より高い部分は調べきれていない。

画面には桁行一間、梁間七間の建物の正立面・断面が一緒に描かれている。屋根は現大仏殿と同様に寄棟造で二重となっており、梁行と桁行で屋根の勾配が異なる振隅となっている点も同じであるが、小屋裏の構造は描かれていない。一層目の周囲一間通りは裳階で、正面に唐破風があることも現大仏殿と同じである。唐破風上部の瓦や大瓶束両脇の装飾は描き起こし図では復元が困難であったため白抜きとしたが、実際には細かく装飾が描きこまれている。開口部と扉は正面七間にあるが、中央二枚、左二枚、両脇二枚、右二枚

など、扉の取り付け方が一様ではない。但し龕座は四枚分がそれぞれの開口部についているので扉は四枚あると思われる。扉の内側は、腰貫より上は菱格子、下は普通の格子となっている。石段は中央一間部分のみにある。左から三間目中ほどで正面の通肘木を切断し、その背面の龕股をみせており、また一番左の裳階部分の柱間においては断面図を表現し、それ以外は裳階屋根を外した正立面を描くなどの図面表現における工夫が見られる。組物には全て皿斗があり、木鼻などに大仏様独特の意匠を見ることが出来る。隅肘木は一・二重目共に八手先まであり、一重・二重目共に四・六手先目に大仏様線形を持つ。両端二間ずつには建具はなく、腰貫より手前に間柱がみえる。これは現大仏殿において腰貫が間柱よりも手前に見えるのとは異なっている。また、屋根に鴟尾はついていない。<sup>(7)</sup>

## 三、大仏殿図諸本の概要

鎌倉再建の東大寺大仏殿が焼失した永禄一〇年（一五六七）から約三〇年後の文禄四年（一五九五）頃、豊臣秀吉が創建した京都・方広寺大仏殿が完成した。参考のため方広寺略年表を（表1）に示す。方広寺大仏殿は『愚子見記』に「京東ノ大仏殿、慶長三<sup>戊戌</sup>年ノ造リハ古奈良ノ造也。」とあり、秀吉が東大寺大仏殿を模して造ったとされている。大仏殿という括りで見ると、永禄一〇年の東大寺大仏殿の焼失後、文禄四年に方広寺大仏殿が建立されるまでの約三〇年間と、慶長七年（一六〇二）に方広寺大仏殿が焼失し、慶長一七年に豊臣秀頼によって再建されるまでの一〇年間を除けば、大仏殿は存在していた。文禄に完成した方広寺大仏殿の建設にあたり、総勢二〇名にも

及ぶ棟梁の長に任命されたのが、豊臣家の御大工中井正吉であった。  
『愚子見記』に「則被<sup>レ</sup>任<sup>二</sup>中井大和<sup>一</sup>」此外<sup>ニモ</sup>受<sup>・</sup>領之棟梁有<sup>レ</sup>ト之云ヘトモ、大綱御前ニテ口<sup>一</sup>上申上ルハ是大和一人也。」とあることから、中井正吉の棟梁としての立場が窺える。慶長一七年の方広寺大仏殿再建の指揮をとったのは中井正吉の子、正清であった。この後の東大寺大仏殿の再建にあたって中井家が関与していることは先にあげた『東大寺年中行事記』などの史料から明らかである。

したがって今回大仏殿内建地割板図の性格を考察するにあたって、方広寺大仏殿の建設が東大寺大仏殿江戸再建に与えた影響を無視することはできず、東大寺大仏殿の史料とあわせて方広寺大仏殿の史料も収集し、比較考察対象に加えることとした。

以下、大仏殿内建地割板図の性格を明らかにするために、現在知られている東大寺・方広寺の図面を挙げる。(一)～(六)は東大寺、①～⑦は方広寺の図面である。図の縮尺はまちまちであるが、掲載

表1 方広寺略年表 (方広寺大仏殿跡現地説明会資料) [(財) 京都市埋蔵文化財研究所、2000年] を参照した)

天正13	1585	秀吉、関白となる。
天正14	1586	聚楽第造営開始。大仏建立の地を「東福寺近傍」と定め、諸大名に用材の諸国運上を命じる。 秀吉、太政大臣となり豊臣姓を与えられる。
天正15	1587	聚楽第ほぼ完成し、秀吉、大阪より移る。
天正16	1588	大仏殿建立再開。建立地を蓮華王院北側に変更。
天正18	1590	小田原攻め。天下統一完了。秀吉、京都の町割り改変に着手。
天正19	1591	大仏殿立柱・上棟式が行われる。金剛仏から漆膠仏に変更。御土居築造。同年中に完成。秀吉、関白職を譲り太閤となる。
文祿2	1593	方広寺大仏殿上棟を行う。
文祿3	1594	伏見城完成、秀吉移る。
文祿4	1595	大仏殿ほぼ完成。秀吉、父母御法会を大仏経堂で行う。
慶長元	1596	畿内に大地震。方広寺大仏と築地大破。伏見城も崩壊。秀吉、大仏像にかえて善光寺如来を迎えることを命ず。
慶長2	1597	伏見城再建、秀吉入場する。
慶長3	1598	7月、善光寺如来到着するも、秀吉の状態悪化に伴い8月に送り返す。8月18日、秀吉、伏見城にて死去。 8月22日、如来不在のまま大仏殿で大仏開眼供養が催される。
慶長4	1599	豊国社遷宮式行われる。秀頼大仏復興を決定、大仏は金剛仏とする。
慶長5	1600	方広寺大仏殿再建開始。関ヶ原の戦い。
慶長7	1602	鑄造中の大仏より出火、炎上。
慶長13	1608	秀頼、再度大仏復興を企図。費用・用材の準備開始。
慶長16	1611	6月、大仏殿地鎮祭。8月、立柱式。
慶長17	1612	大仏に金箔が押され、台座・敷石など大半が完成。
慶長19	1614	梵鐘完成。家康、梵鐘銘文に異議をとえ大仏開眼供養の延期を命じる。
元和元	1615	大阪夏の陣。豊臣氏滅亡。
寛文元	1661	大仏殿修復開始
寛文2	1662	地震にて大仏小破。木造に造りかえられる。
寛文7	1667	木造大仏及び堂舎完成。
寛政10	1798	大仏殿に落雷、出火。本堂、楼門、大仏焼失。
天保年間	1830～43	尾張国から半身の木造の大仏を造って進め安置する。
明治2	1869	豊国神社の再建が決定し、方広寺大仏殿内が新社地となる。
昭和10	1935	豊国神社の大鳥居が完成。
昭和48	1973	方広寺大仏殿が火災で全焼。

するにあたって全て縮尺二／五〇〇に統一した。

### 東大寺大仏殿関連図面

- (一) 大仏殿内建地割板図 (東大寺蔵) (図1写真、図2描き起こし図)
  - (二) 木子文庫堀内家文書〈木0001-2-02〉 (東京都立中央図書館蔵)
  - (三) 木子文庫堀内家文書〈木0001-2-11〉 (東京都立中央図書館蔵) (図3)
  - (四) 木子文庫堀内家文書〈木0002-1-02〉 (東京都立中央図書館蔵) (図4)
  - (五) 大仏堂貳百分一之図 (京都大学付属図書館蔵) (図5)
  - (六) 文化九年複製図 (『東大寺金堂 (大仏殿) 修理工事報告書』／方広寺大仏殿設計図 (平岡定海蔵) (『日本寺院史の研究』<sup>(10)</sup>) (図6)
- このほか参考のため、現在の東大寺大仏殿 (『東大寺金堂 (大仏殿) 修理工事報告書』) (図7) もあわせて掲載する。

### 方広寺大仏殿関連図面

- ①京大仏 (『愚子見記』<sup>(11)</sup>)
- ②方広寺大仏殿惣指図 (京都府立総合資料館蔵)
- ③北京大仏殿之図 (『匠明』<sup>(12)</sup>)
- ④洛陽大仏殿 (東京国立博物館蔵) (『古図に見る日本の建築』・『日本建築史圖集』第九版)<sup>(14)</sup> (図8)
- ⑤方広寺大仏殿諸建物并三十三間堂建地割図 (中井正知蔵) (『大工頭中井家建築図集 中井家所蔵本』<sup>(15)</sup>／慶長度方広寺大仏殿実測図 (『愚子見記の研究』)<sup>(16)</sup> (図9)

⑥方広寺大仏殿 (所蔵不明) (『日本建築史要』) (図10)

⑦京都大仏殿之図 (東京国立博物館蔵) (図11)

なお、方広寺大仏殿については復原図<sup>(17)</sup>が作成されている。

### 四、大仏殿図諸本の特徴

以下、大仏殿の図面それぞれについて、

- a 概要、b 規模に関する記述、c 特徴の順に述べる。

### 東大寺大仏殿関連図面

- (一) 大仏殿内建地割板図 (東大寺蔵) (図1写真、図2描き起こし図)
  - a 桁行・梁間の立面図・断面図、一枚、三二八〇×五九八〇mm (画面右に) 大佛殿 梁行貳拾五間三尺九寸 桁行四拾参間四尺三寸 但貳拾分之壹寸 (額左に) 元禄元年計畫圖
  - c 前述
- (二) 木子文庫堀内家文書<sup>(18)</sup>〈木0001-2-02〉 (東京都立中央図書館蔵)
  - a 東大寺大仏殿廻り指図 (元禄八年三月) (堀内家) 図面 (貼絵図) 一枚 一一二×五八cm 外題「大仏殿廻り惣指図 但式分計 元禄八年亥三月」 (『東京都立中央図書館蔵木子文庫目録』<sup>(19)</sup>による)。
  - b 桁行四拾三間四尺七寸 (消して右横に) 二十九間五尺三寸 梁間

式拾五間四尺壹寸

- c 中門・回廊などとともに、大工小屋・削木小屋などの作業小屋も書き込まれた平面図で、大仏殿は桁行一間、梁間七間で描かれているが、桁行中央七間を朱線で囲み、寸法も桁行一間分の寸法が縦線で消され、右横に七間分の寸法が書かれている。その他、柱間寸法、壇上長、天井の仕様や柱間装置の記入があり、正面中央七間は大仏殿内建地割板図と同様の建具（格子・上菱欄間、外は板唐戸四枚）となっている。堂内には増長天跡・持国天跡・廣目天跡・多聞天跡、という記述も見られる。作業小屋の寸尺の書き入れもあり、かなり綿密な内容といえる。

(三) 木子文庫堀内家文書（木001-2-11）（東京都立中央図書館蔵）（図3）

- a 東大寺大仏殿建地割（桁行、含梁行）（堀内家）図面一枚 五八・五×一一六cm 題箋「大仏殿桁行断面」（『東京都立中央図書館蔵木子文庫目録』による。）
- b 記載なし

- c 桁行一間の断面図で、中央に唐破風を持つ。簡略に描かれており寸法の記入はない。縮尺は一／一〇〇に近い。身舎内部の大仏上に方杖を用いているのが特徴的で、梁と柱に金物で連結する。軒は一重・二重ともに七手先で、それぞれ四・六手先目に大仏様の繰型をもつ。

(四) 木子文庫堀内家文書（木002-1-02）（東京都立中央図書館蔵）（図4）

- a 大仏殿建地割（正面）（堀内家）図面一枚 一三九・五×二八一cm 内題「大佛殿四拾分毫」、題箋「大佛殿」（『東京都立中央図書館蔵木子文庫目録』による。）

- b 一、中ノ間二丈九尺五寸 但脇ノ間ハ次第ニ壹尺ヲトリ 桁行合式拾九丈四尺五寸 但六尺五寸間四拾五間四尺 梁行合拾八丈五寸 但六尺五寸間式拾七間五尺 柱のふとさ四尺四寸 内の柱五尺四寸

- c 縮尺一／四〇で桁行断面図、正面向かって左半分が描かれている。柱間寸法の記入があるが、図とは一致しない。組物、彫刻など全体にわたる表現が（一）大仏殿内建地割板図によく似ているが、柱間寸法などは異なる。柱は通し柱である。

前述『近世建築の生産組織と技術』のなかで平井氏が「大仏殿内の建地割と縮尺が違い、『匠明』に示されている方広寺の大仏殿の図と同じ寸法で、東大寺大仏殿の計画図ではなく東大寺の大仏殿再興に際して参考にされたものかもしれない。」と述べているように、桁行、梁間、柱間、屋根勾配寸法は『匠明』の「北京大仏殿之圖」による。同じ縮尺で妻面（木002-1-1-01）があり、こちらも『匠明』の寸法にのっとった図面である。

(五) 大仏堂貳百分一之図（京都大学付属図書館蔵）（図5）

- a 中井家絵図書類 第五五号 社寺図一 図面一枚（二枚継ぎ合せ） 二九・一×四〇・五cm 内題「大仏殿」「大仏殿貳百分一之圖」

- b 桁行拾八丈八尺二寸間 間ニシテ式拾八間六尺二寸 梁行拾六丈六尺六寸間 間ニシテ式拾五間四尺壹寸 但六尺五寸一間ニシ



テ 柱数六拾本内：（以下略）

- c 立面図の半分と平面図が紙の左右にそれぞれ描かれている。縮尺一／二〇〇。立面図は七間で現大仏殿の立面に近く、小屋裏の架構は朱でかかっている。平面図は桁行中央七間が墨で、縮小された両端から二間ずつが朱でかかっている。桁行・梁間寸法、各柱間寸法は天平・鎌倉再建時に同じである。その他、延べ坪、瓦数などの詳しい記述がある。

(六) 文化九年複製図（『東大寺金堂（大仏殿）修理工事報告書』／方広寺大仏殿設計図（平岡定海蔵）（『日本寺院史の研究』）（図6）

- a 内題「大佛殿百分一之圖」  
b 記載なし

c 桁行一間の立面・断面図である。縮尺一／一〇〇。『東大寺金堂（大仏殿）修理工事報告書』では東大寺大仏殿の「文化九年の複製図」として所載されているが出典が明らかではない。『日本寺院史の研究 中世・近世編』では平岡定海氏所蔵の方広寺大仏殿の図面として掲載されているが、図面に関する説明はない。

寸法記入はなく、背の高いプロポーションを持つ。正面唐破風は他に比して曲線が緩い。正面五間は板戸となっており、すべて閉じている。石段は正面三間にある。軒先の肘木をみると一重目は三・五・七手先目が、二重目は五・七手先目が大仏様繰型を持ち、大仏殿内建地割板図とは異なる（一重目、二重目ともに四・六手先目に繰型）。また、腰貫が間柱よりも手前に見えており、これも異なる。

## 方広寺大仏殿関連図面

① 京大仏（『愚子見記』）

a 『愚子見記』所載の記述と平面図

b 一、仏殿 四拾五間二尺「ニ梁」二拾七間五尺

一、高サ棟迄十六丈 棟ノ長二十一間

一、柱数九十二本 内棟柱長十六間

一、柱指渡 側柱四尺二寸亦ノ三寸

隅ハ五尺ヨリ五尺三寸迄

入側四尺四寸ヨリ四尺七寸迄

一、大虹梁 長十四間 竪七尺  
広五尺

一、茅負長五拾四間五寸：（以上抜粋）

c 平面図には各柱間寸法と大虹梁、大仏の座が記入されているが簡略である。図面の前に詳しい寸法の記述があり、その内容の細かさからみると寛文元年（一六六一）より行われた修復時にとられた寸法のものである。

② 方広寺大仏殿惣指図（京都府立総合資料館蔵）

a 方広寺大仏殿惣指図 万治年間（一六五八～一六六一）貼絵図・

四分計・九一・五×一三七・九cm（『中井家文書目録』 京都

府立総合資料館紀要第一〇号 昭和五六年による）

b 大佛殿 四拾五間式尺 式拾七間五尺

c 広く回廊の外までを描く西正面の平面図である。各柱間寸法、建具の記入はない。石段は正面中央三間、後中央一間、側面中央一間についている。天井仕様、敷石などの記入がある。



③ 北京大仏殿之図（『匠明』所載）

a 『匠明』所載の平面図

b 各柱間寸法の記述があり、中央間は「貳丈九尺五寸間」、脇に移るにしたがって柱間はそれぞれ一尺ずつ減じている。

c 簡略な図面である。中央には「釈迦如来」、その脇に「脇仏」、四方には「四天王」の記述が見られ、釈迦如来上部には大虹梁を示す線が二本記入されている。『匠明五卷考』<sup>(20)</sup>方広寺大仏殿の項における解説では、記載の平面図は天正度造営の大仏殿ではなく、慶長度造営の堂の寸法を記したものであると結論付けている。

④ 洛陽大仏殿（東京国立博物館蔵）（『古図に見る日本の建築』『日本建築史図集（第九版）』所載）（図8）

a 内題「洛陽大仏殿 二百分一ノ雛型 慶長十五庚戌年六月式一日新始」

b 桁行四拾五間式尺六寸 梁行式拾七間六尺三寸 高サ式拾五間但石ヨリ棟瓦上マデ…（以下略）

c 『古図に見る日本の建築』諸堂図の項に所載されている桁行一間梁間七間の慶長度再建時の立・断面図である。縮尺は一／二〇〇。『日本建築史図集』には同じ断面図とともに平面図も所載。一軒で、垂木先に鼻隠板を打ち、化粧屋根裏とし、虹梁の円形断面・下面の枳杖彫、棧唐戸を臺座で貫に釣るなど、大仏様の特徴を備えている。屋根の反りも殆どない。棧唐戸は中央三間と、両脇から三間目、正面合計五間分に付いている、また腰貫がなく、正面石段は描かれていないなど、他図面とは異なる

った表現がみられる。

⑤ 方広寺大仏殿諸建物并三十三間堂建地割図（中井正知蔵）（『大工頭中井家建築図集 中井家所蔵本』所載）／慶長度方広寺大仏殿実測図（『注釈愚子見記』所載）（図9）

a 内題「大佛殿」、三五・七cm、長さ五五六・四cmの巻物に描かれた方広寺大仏殿の正立面図、側立面及び縦断面図。

b 大佛殿 桁行四拾七間壹尺二分三厘余 但三十丈七尺 貳百分一之圖 但西正面之圖

一、胴建高サ地覆上ヨリ飛貫下迄三丈壹尺但四間五尺  
一、柱太サ五尺ヨリ五尺五寸迄

一、腰貫セイ二尺地覆之間タ一丈一寸

一、胴縁柱壹尺五寸

一、貫内法高サ三丈一尺五寸

c 縮尺一／二〇〇で、桁行一間、梁間七間。西側・北側正面図の二枚の図面があり、それぞれ半分が架構図となっている。詳細な書き込みに加え、彩色の塗りわけがされているなど、丁寧な仕上げとなっている。

桁行断面図では中央五間に柱がなく、柱間一間以上の長さがある片持の横材に大虹梁を乗せるという大胆な構造となっている。④洛陽大仏殿の図面と違って化粧屋根裏としていないが、その他は大仏様の特徴を備え、折衷した様式を示す。但し軒先の肘木には線型がない。地垂木と天井の上が白抜きとなっており、その天井裏を知ることが出来ない。正面中央七間が開口部で、板戸とその背面の格子を表現するのにそれぞれ違った描き

方をして工夫している。格子は上下ともに縦長の格子である。正面石段は中央三間部分と側面中央一間にある。

『愚子見記の研究』では、慶長度再建方広寺の実測図面として紹介している。桁行・梁間寸法が厘単位まで記述されており、また飛貫高、柱太さ、腰貫、胴縁柱、貫内法など、実測ができそうなところに記述が限られている。更に天井上は白抜きとなっており小屋裏の構造を知ることができないなど、実測図らしいところが見受けられるが真偽は不明である。

大仏殿の他にも仁王門、回廊、鐘撞堂の縮尺一／一〇〇の図面があり、こちらも大仏殿同様の丁寧な仕上げとなっている。

#### ⑥ 方廣寺大佛殿（所蔵不明）（『日本建築史要』（図10））

a 正立面図、側立面及び縦断面図、平面図。方広寺の項所載。寛政六年（一七九四）の年紀がある。

b 寸法の記入はない。ただし平面図の上に、

一、桁行四拾七間壹尺二分三厘 但シ參拾丈七尺  
一、梁行二拾九間四尺五寸六分九厘

但十九丈三尺

大仏殿 桁行四拾五間二尺

梁行二拾七間三尺：

以下、鐘樓、二王門とその回廊、南門とその回廊の桁行・梁間寸法が記述されているという。

c 縮尺一／二〇〇で、桁行一間、梁間七間。正面図・側面図の半分が断面図となっている。平面図が扉、軒先の組物と一緒に後ろに小さく描かれている。

天沼氏は『日本建築史要』のなかで「『寛政六年閏一月中旬、西村七三郎』と、最後のところに記してある方広寺の図がある。

初めに『洛陽方広寺、大仏殿二百分壹之圖』として、半正立面・半横断面、半側立面・半縦断面が一／二〇〇でかいてあり、終わりのほうに小さく平面図と組物詳細と扉の圖とがで、居り、境内各建物の平面の寸尺が記してある。これは此の大仏殿が焼ける四年前のもので、どうも確からしい圖である。」と述べ、また寸法については「寸尺信用に足りる」と本文中で述べているが、桁行、梁間ともに寸法が二つ書かれていることには触れていない。

桁行・梁間断面図はともに（⑤方広寺大仏殿諸建物并三十三間堂建地割図／慶長度方広寺大仏殿実測図）とほぼ同じである。しかし、立・断面図と平面図では柱の本数が一致しない。また平面図に描かれている、大虹梁の位置と思われる二重線と断面図の大虹梁の位置が異なっている。

#### ⑦ 京都大仏殿之図（東京国立博物館蔵）（図11）

a 内題「大仏殿」 正立面図、側立面及び縦断面図。

b 大佛殿 桁行四拾七間壹尺二分三厘余 但三十丈七尺 貳百分一之圖 但西正面之圖

一、胴建高サ地覆上自飛貫下迄三丈壹尺但四間五尺  
一、柱太サ五尺ヨリ五尺五寸迄  
一、腰貫セイ二尺地覆之間タ一丈一寸  
一、胴縁柱壹尺五寸  
一、貫内法高サ三丈一尺五寸

c 縮尺は一／二〇〇で桁行一間、梁間七間。西側及び北側正面図の半分が架構図となっており〈⑥方廣寺大佛殿〉の図面とは軒隅の風鐸がないこと、唐破風と裳階屋根の取り付き部分が直線になっている点が異なるが（⑥方廣寺大佛殿）は曲線となっている）、その他は図の表現方法、細部や構造に至るまでが酷似しており、プロポーションもほぼ同じである。

## 五、大仏殿内建地割板図と大仏殿諸本の比較・考察

以上の諸本の寸法関係の比較を行ったのが（表2）である。

比較項目は以下の通りである。

- ① 桁行寸法
- ② 梁行寸法
- ③ 柱間寸法
- ④ 高さ
- ⑤ 屋根勾配一層目／二層目
- ⑥ 大棟の長さ
- ⑦ 軒の出一層目／二層目
- ⑧ 軒高一層目／二層目

比較にあたって、各部の寸法は建物の原寸で表記した。間で明記されているものは一間Ⅱ六・五尺として計算し、数値の単位は尺とした。

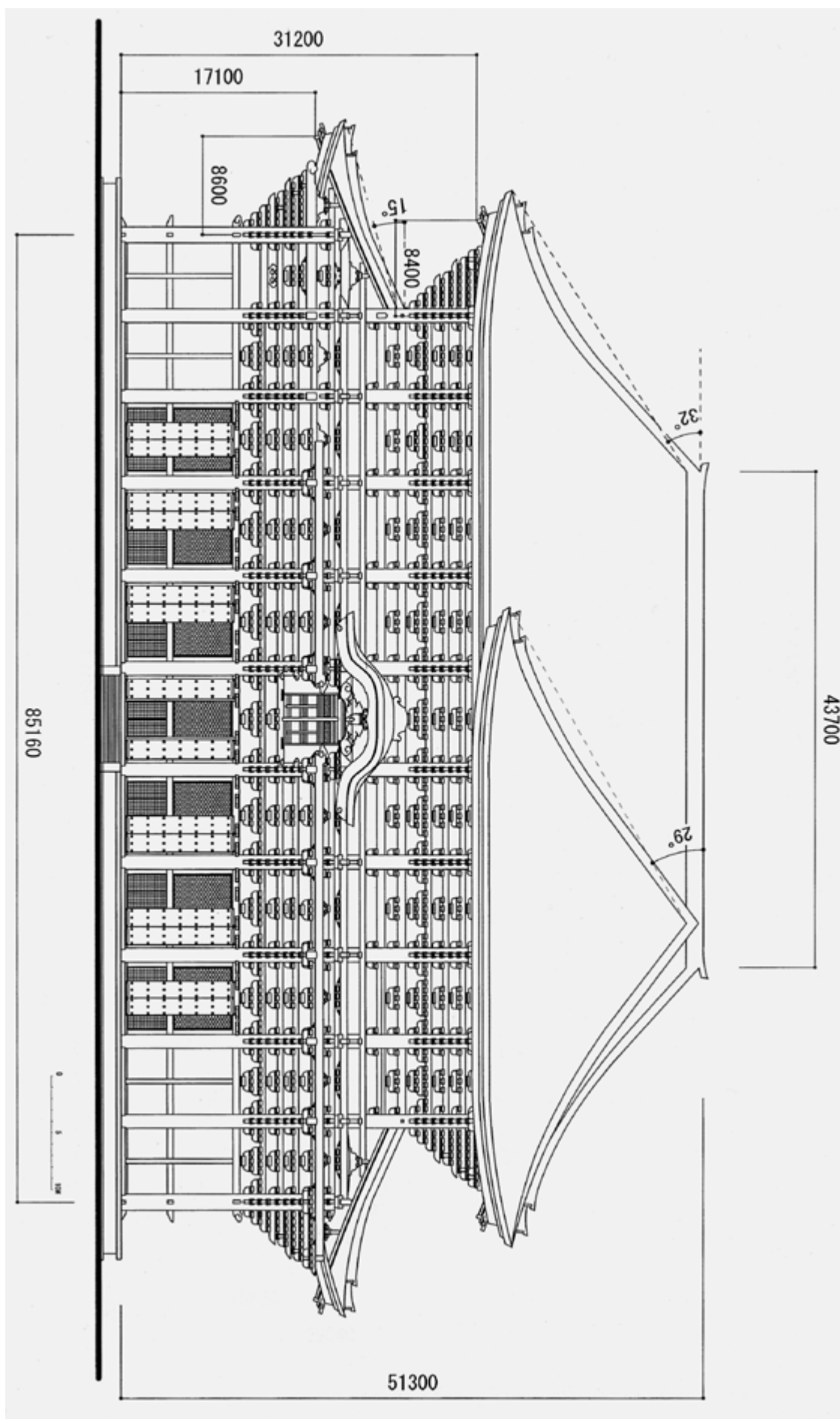


図 2 大仏殿内建地割板図 (東大寺蔵) 桁行283.8尺 梁間166.4尺  
原図は縮尺1/20、ここでは縮尺1/500で掲載



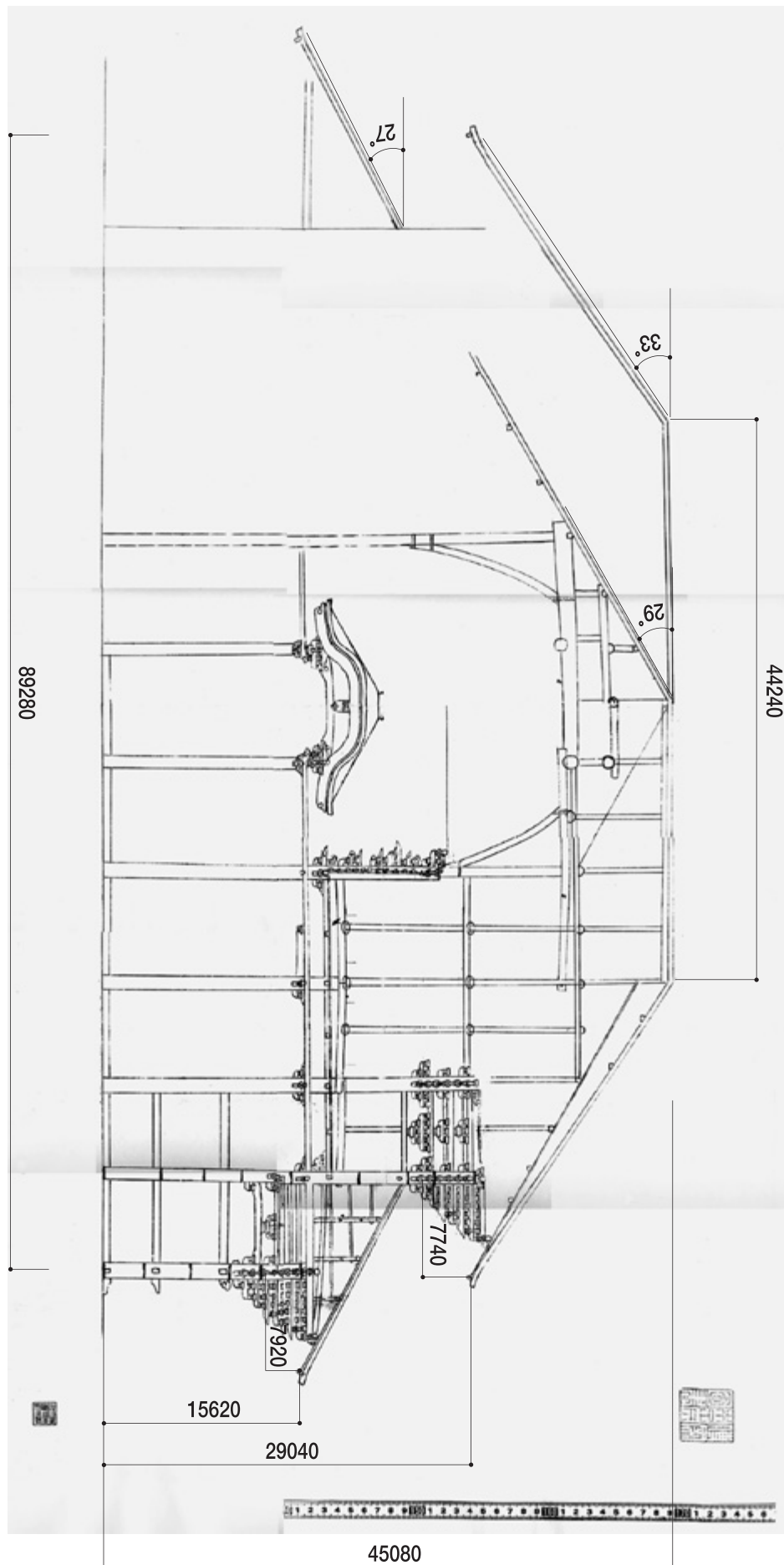


図 3 木子文庫堀内家文書〈木001-2-11〉(東京都立中央図書館蔵)  
 ここでは縮尺 1/500 で掲載 (桁行などの寸法は中央間を仮に 29.4 尺として図から割りだした値)

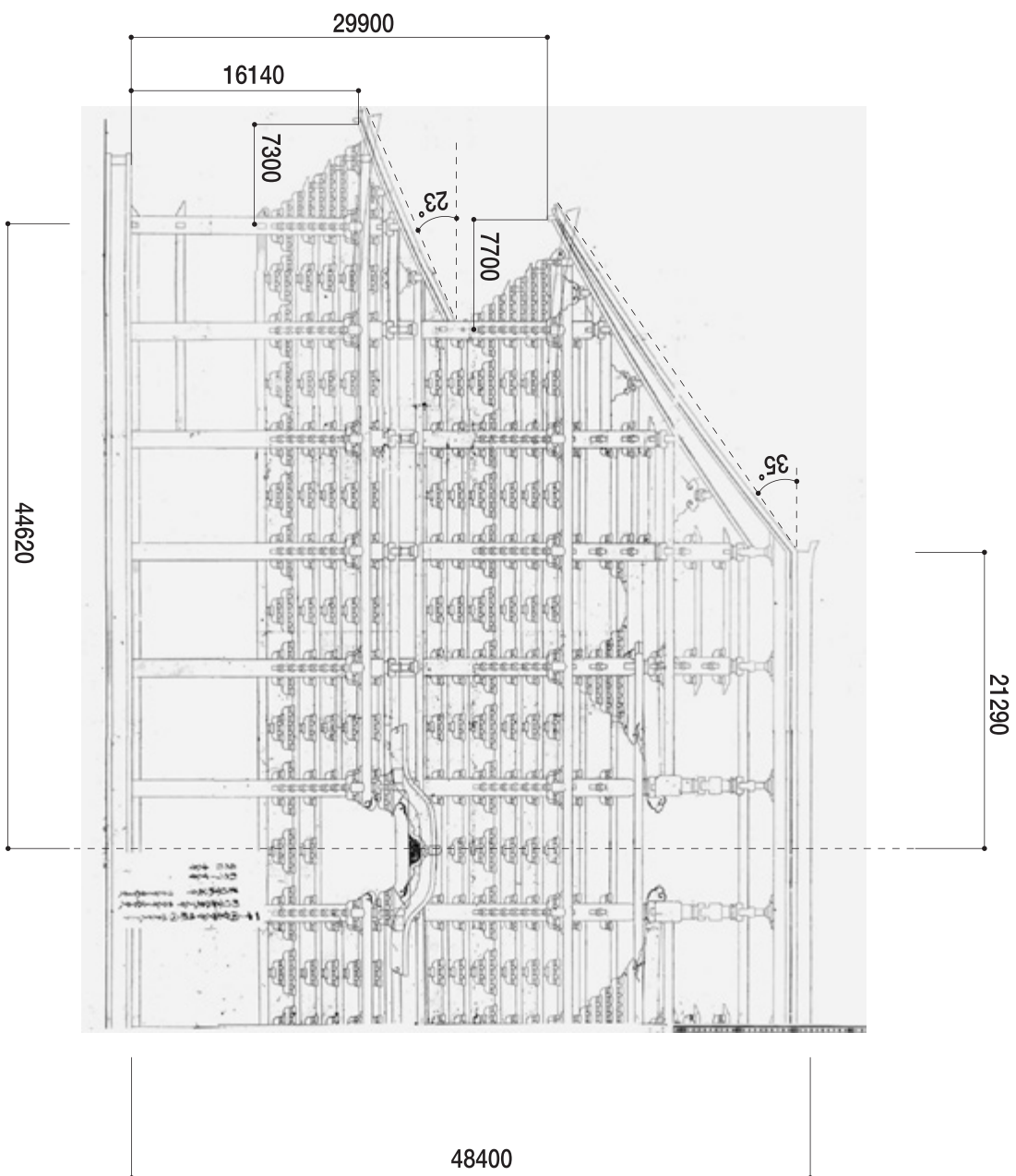


図 4 木子文庫堀内家文書〈木002-1-02〉（東京都立中央図書館蔵） 桁行294.6尺  
原図は縮尺1/40、ここでは縮尺1/500で掲載

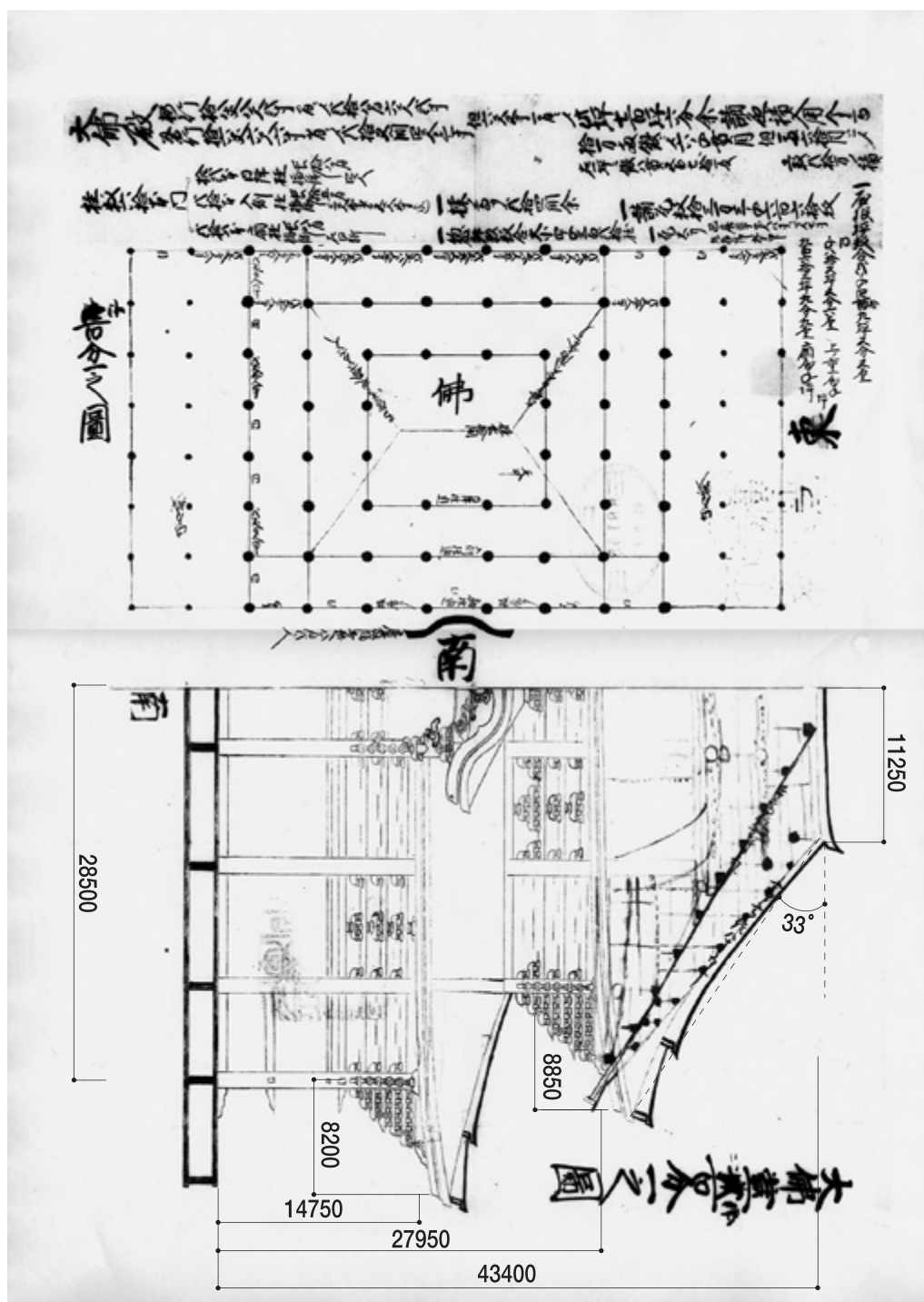


図 5 大仏堂貳百分之一之図 (京都大学附属図書館蔵) 桁行284.3尺 梁間166.6尺(平面図)  
原図は縮尺1/200、ここでは縮尺1/500で掲載

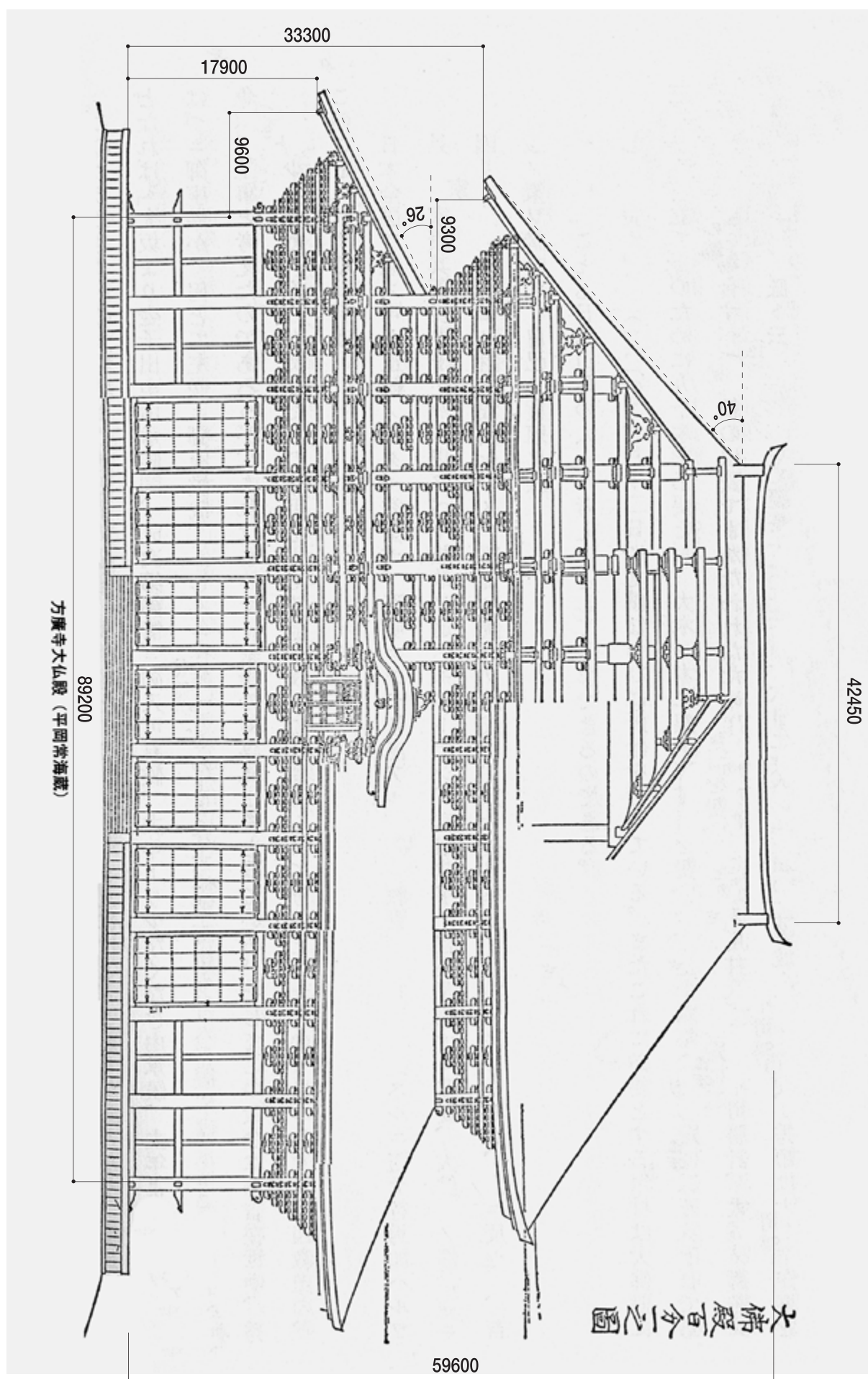


図 6 文化九年複製図『東大寺金堂(大仏殿)修理工事報告書』方広寺大仏殿設計図 (平岡定海蔵) (『日本寺院史の研究 中世・近世編』)  
 原図は縮尺 1/100、ここでは縮尺 1/500 で掲載 (桁行を仮に244.5尺とした)



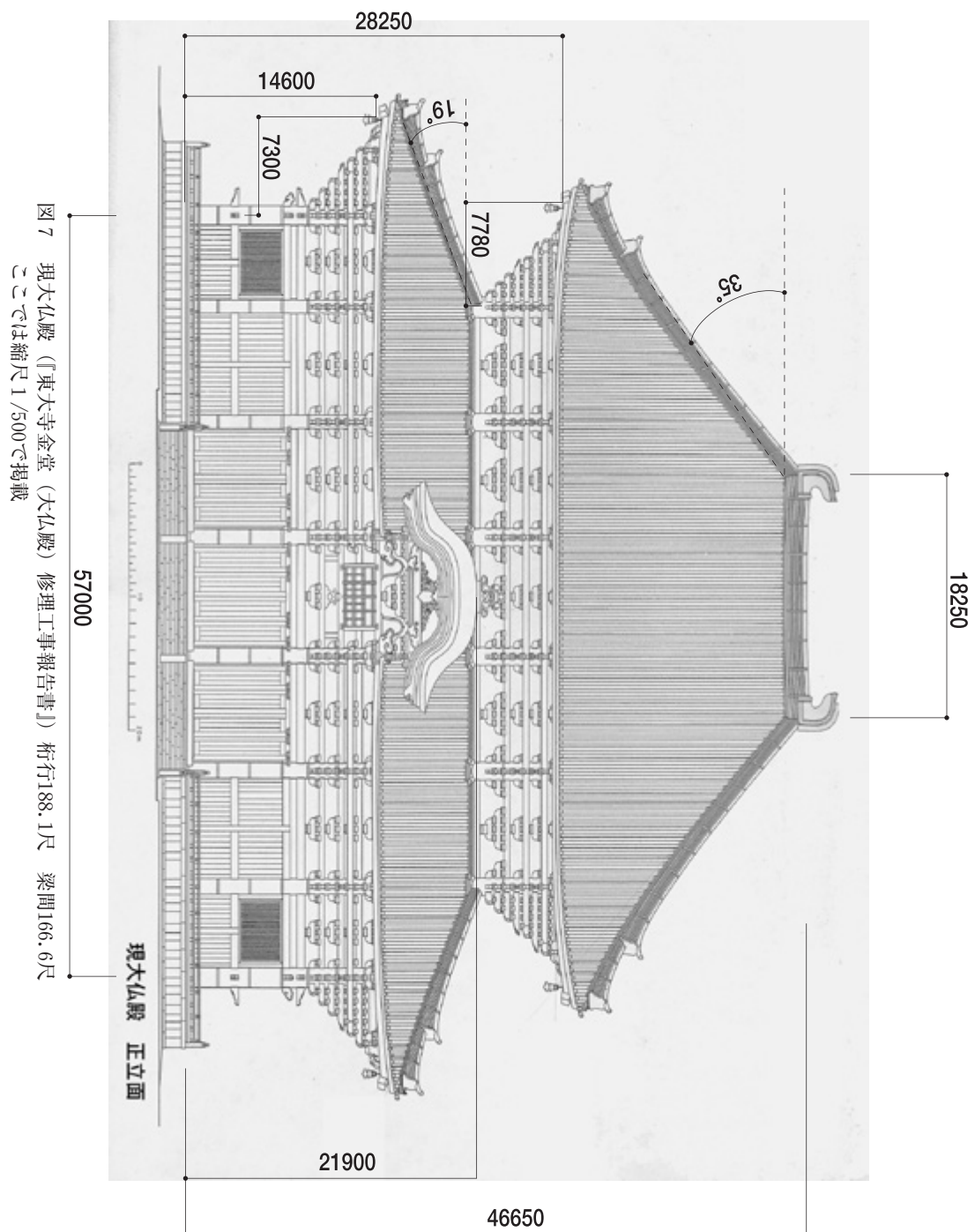


図 7 現大仏殿 (『東大寺金堂 (大仏殿) 修理工事報告書』) 桁行188.1尺 梁間166.6尺  
 ここでは縮尺 1/500 で掲載

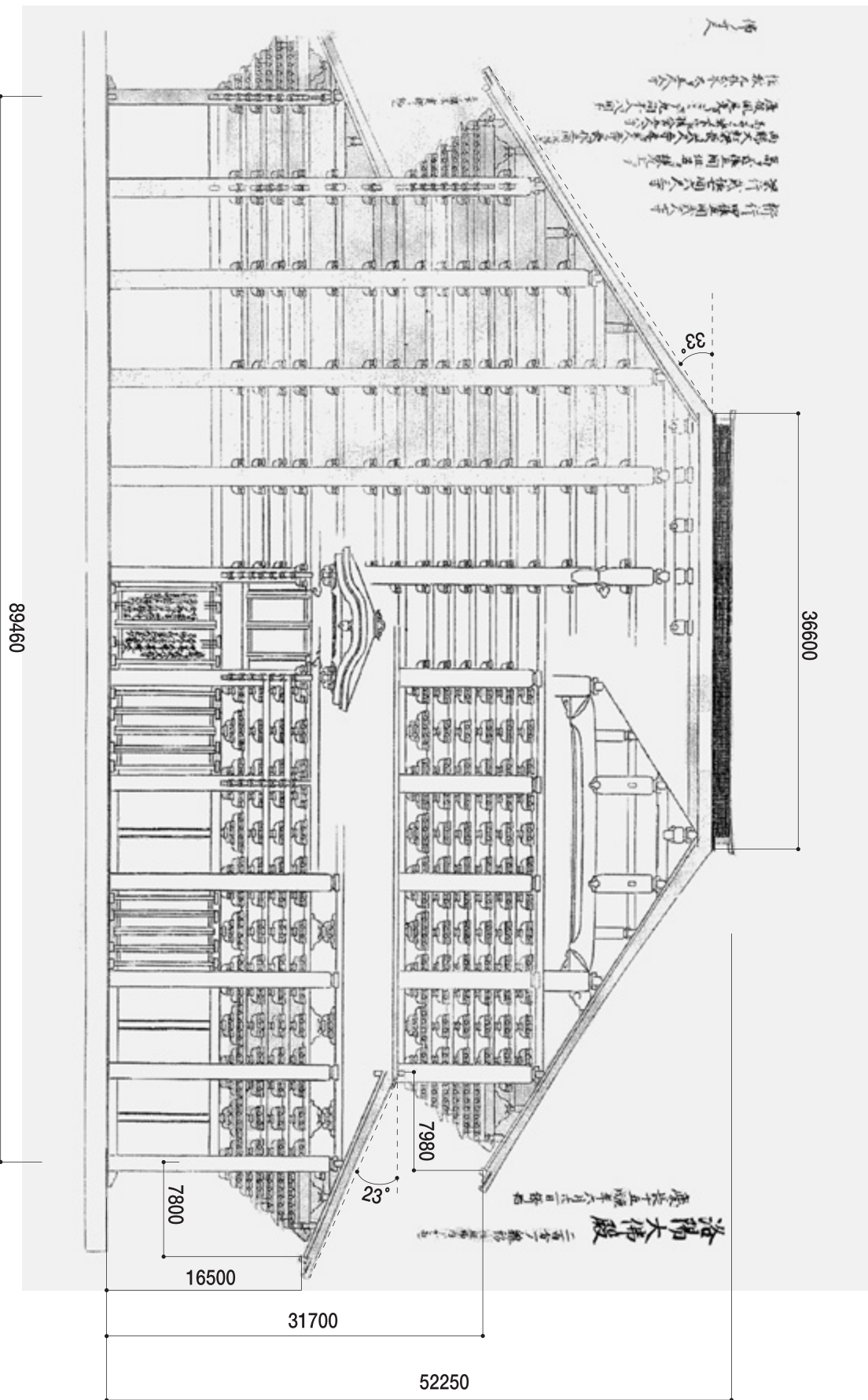


図 8 洛陽大仏殿 (東京国立博物館蔵) (『古図に見る日本の建築』／『日本建築史圖集』第 9 版) 桁行 295.2 尺  
原図は縮尺 1/200、ここでは縮尺 1/500 で掲載

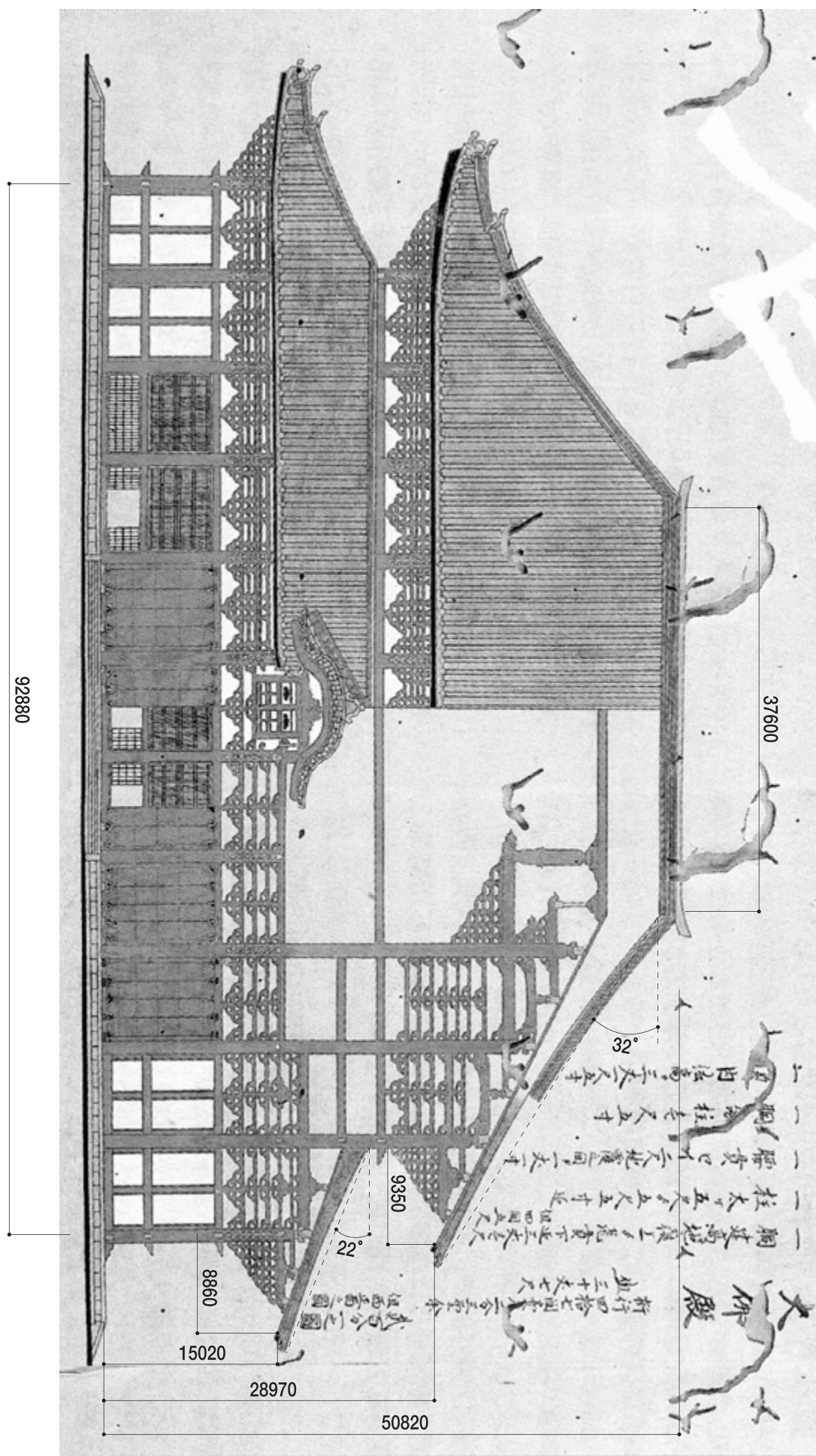


図 9 方広寺大仏殿 (中井正知蔵) (『大工頭中井家建築図集』 / 『愚子見記の研究』) 桁行306.5尺  
 原図は縮尺1/200、ここでは縮尺1/500で掲載



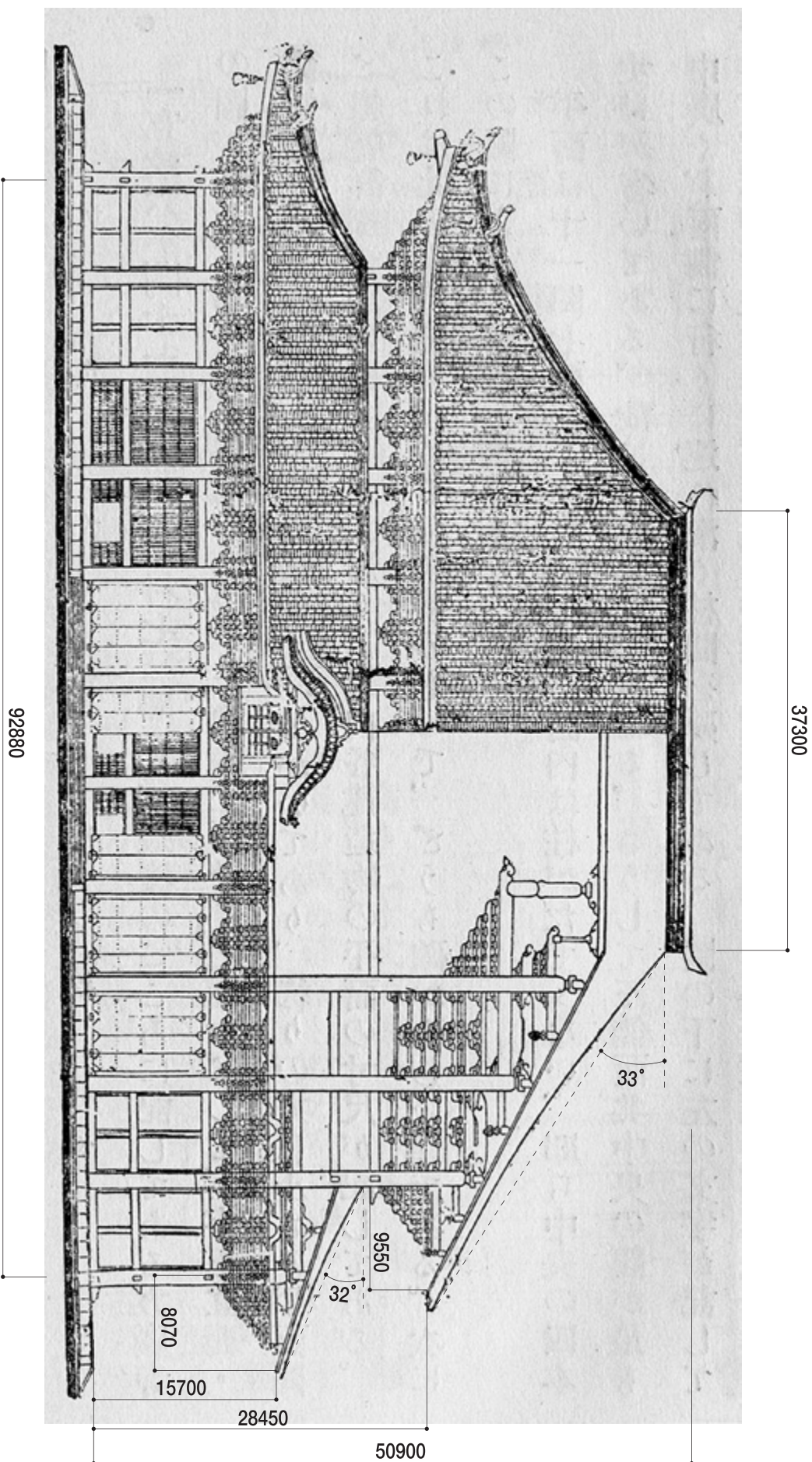


図10 方広寺大仏殿 (所蔵不明) (『日本建築史要』 桁行306.5尺  
原図は縮尺1/200、ここでは縮尺1/500で掲載)



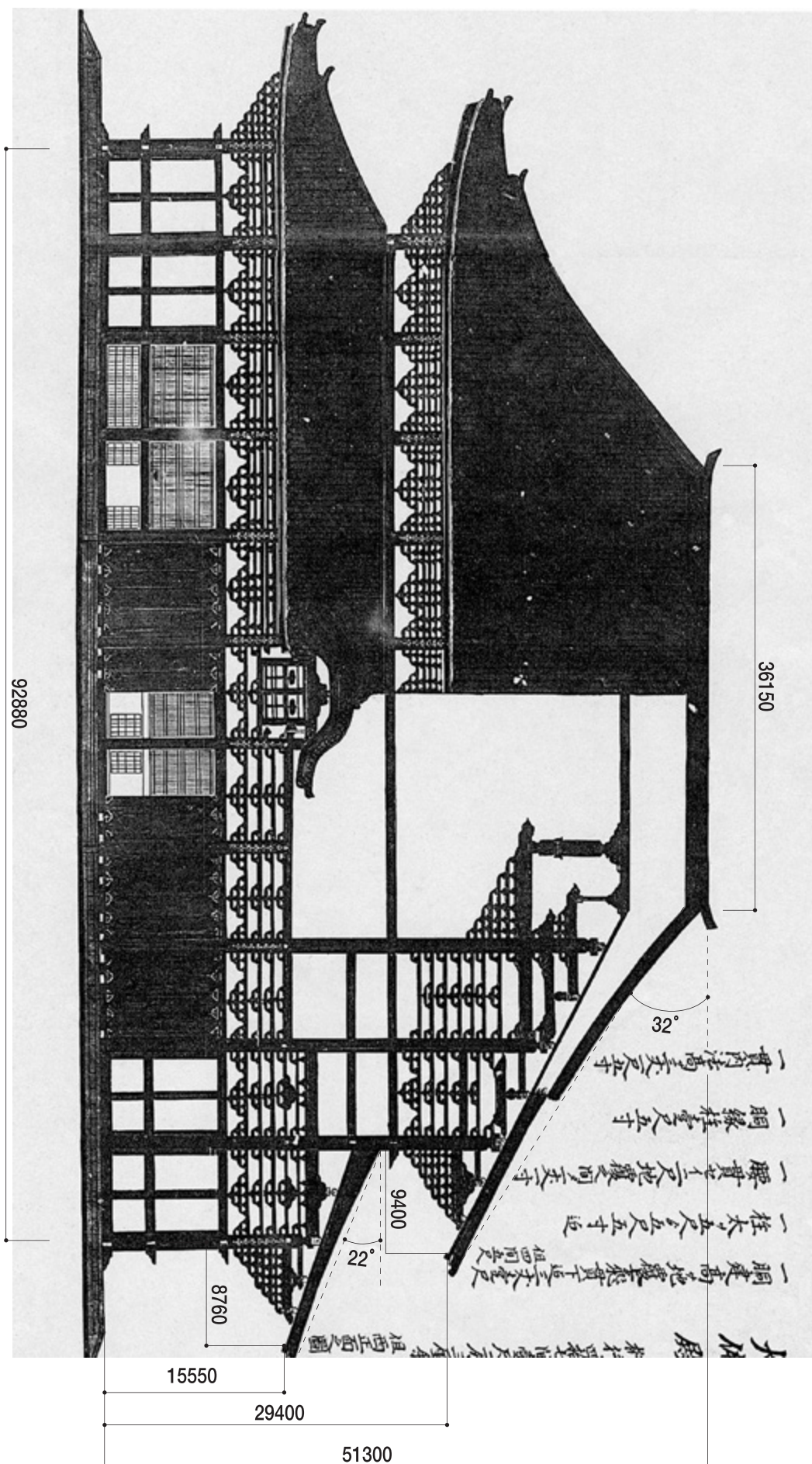


図11 京都大仏殿之図 (東京国立博物館蔵) 桁行306.5尺  
原図は縮尺1/200、ここでは縮尺1/500で掲載

表 2

	縮尺	①桁行	②梁間	③柱間 左から1	2	3	4	5	6(中央)	7	8	9	10	11	④高さ	⑤屋根勾配1層目	2層目	⑥大棟⑦軒の長さ	出1層目	2層目	⑧軒高1層目	2層目	注)
	現大仏殿	188.1	166.6			22.5	28.4	28.4	29.4	28.4	28.4	22.5			153.1	19°	35°	57.4	22.3	22.3	46.7	90.4	図7
(一)	大仏殿内建地割板図	1/20	283.8	166.4	23.4	23.4	25.2	27.0	29.2	27.0	27.0	25.2	23.4	23.4	170	15°	32°	144	28	28	57	103	図2
(二)	木子文庫堀内家文書 〈木001-2-02〉		284.2	166.6	22.6	22.6	25.4	28.3	29.4	28.5	28.3	25.4	22.6	22.6									
(三)	木子文庫堀内家文書 〈木001-2-11〉	1/100	(294.6)		(23.7)	(24.8)	(26.8)	(28.4)	(29.4)	(28.4)	(29.4)	(26.8)	(24.8)	(23.7)	(148.8)	27°	29°	(146.0)	(26.1)	(25.5)	(51.5)	(95.8)	図3
(四)	木子文庫堀内家文書 〈木002-1-02〉	1/40	294.5	180.5	24.2	25.1	26.6	27.1	28.5	29.5	28.5	26.6	25.1	24.2	159.7	23°	35°	140.5	24.1	25.4	53.3	98.7	図4
(五)	大仏堂貳百分一之図	1/200	284.3	166.6	22.6	22.6	25.4	28.3	29.5	28.5	28.3	25.4	22.6	22.6	143.2	14°	33°	74.2	27.1	29.2	48.7	92.2	図5
(六)	文化九年複製図/ 方広寺大仏殿設計図	1/100	(301.0)		(25.9)	(26.8)	(27.6)	(27.9)	(29.4)	(27.9)	(27.6)	(27.6)	(26.8)	(25.9)	(196.9)	26°	40°	(140.1)	(31.7)	(30.7)	(59.1)	(109.9)	図6、中央間 29.4尺のとき
(六)	同		(294.5)		(25.3)	(26.2)	(27.0)	(27.3)	(28.8)	(27.3)	(27.0)	(27.0)	(26.2)	(25.3)	(192.6)			(137.1)	(31.0)	(30.0)	(57.8)	(107.5)	桁行 294.5尺 のとき
(六)	同		(283.8)		(24.4)	(25.3)	(26.0)	(26.3)	(27.7)	(26.3)	(26.0)	(26.0)	(25.3)	(24.4)	(185.7)			(132.1)	(29.9)	(28.9)	(55.7)	(103.6)	桁行 283.8尺 のとき

①	京大仏〈墨子見記〉	294.5	180.5	24.5	25.5	26.5	27.5	28.5	29.5	28.5	27.5	26.5	25.5	24.5	160.0			136.5			53.5	95.8	
②	方広寺大仏殿惣指図	294.5	180.5	23.7	25.6	27.2	27.8	28.3	29.3	28.3	27.8	27.2	25.6	23.7									
③	北京大仏殿之図〈匠明〉	294.5	180.5	24.5	25.5	26.5	27.5	28.5	29.5	28.5	27.5	26.5	25.5	24.5	160*	26°	32°	27.0	27.0				*大地より棟 までの高さ
④	洛陽大仏殿 1/200	295.2	181.3	25.4	25.4	26.5	27.1	28.8	28.8	28.8	27.1	26.5	25.4	25.4	172.4	23°	33°	120.8	25.7	26.3	54.4	104.6	図8
⑤	方広寺大仏殿…/慶長 度方広寺大仏殿実測図	1/200	306.5	193.1	27.1	27.1	29.8	28.4	29.0	29.0	27.4	28.4	27.1	27.1	167.7	22°	32°	124.1	29.2	30.9	49.6	95.6	図9
⑥	方広寺大仏殿 1/200	306.5	193.1	26.9	26.9	27.7	28.5	29.3	29.3	29.3	27.1	27.7	26.9	29.9	167.9	23°	33°	123.1	26.6	31.4	51.8	93.9	図10
⑦	京都大仏殿之図 1/200	306.5	193.1	27.1	27.1	27.9	27.9	28.8	28.8	28.8	27.9	27.9	27.1	27.1	169.3	22°	32°	119.2	28.9	31.0	51.3	97.0	図11

比較にあたって、各部の寸法は建物の原寸で表記した。なお、比較のため、間で明記されているものは1間=6.5尺として計算し、数値の単位は尺とした。

寸法が史料に明記されているものに関しては太字にしている。桁行・梁間寸法、柱間寸法ともに記述が無いものに関してはその中央間を仮に2丈9尺4寸とし、中央間以外の柱間は図面から算出し、括弧つきで示してある。

各柱間寸法はないが、桁行・梁間寸法が明記されているものは各柱間の幅の比から寸法を割り付けた。

③柱間寸法はすべて芯々寸法であり大仏殿内建地割板図に関しては実測値と縮尺から割り出した実寸を記した。

④高さについては記述されているもの以外は基壇上から棟瓦上端までの数値を取った。

⑤屋根勾配に関してはすべて度で表記した。

⑥軒の出は一番外側の柱芯から側面の鼻隠板までとした。

⑦軒高は基壇上から鼻隠板までとした。

⑧⑧に關し、側面の鼻隠板が描かれていないものは正面の鼻隠板までの寸法を取っている。

## 六、比較・考察

大仏殿内建地割板図は桁行二八三・八尺、梁間一六六・四尺であり、方広寺大仏殿の三種類の寸法とは異なる。また桁行、梁間は創建東大寺大仏殿の規模と一致する。柱間中央、二九・二尺は天平創建時、現大仏殿の二九・四尺とほぼ一致し、また中央七間分の合計値一八七・六尺は現大仏殿の一八八・一尺に近似する。しかし柱間それぞれに関しては旧来の礎石位置を考慮した柱割とはいえず、また方広寺大仏殿の各図面や（六）文化九年複製図／方広寺大仏殿設計図の柱割とも異なる独自の数値をとっている。軒高は一層目、二層目それぞれ現状より一〇尺ずつ高くなっている、基壇上から棟瓦上部までの高さは約二〇尺高い一七〇尺となっている。しかし屋根勾配は現大仏殿に近い。軒は一層目・二層目ともに約四尺深い。

大仏殿の工事が本格的に始まってから後に、全く独自の柱間や高さを持つ図面を、幅六m近くもある画面に大々的に描くとは考えにくい。立柱が行われたのは元禄一〇年（一六九七）であり、この後に高さを二〇尺近くも変更するのは難しいだろう。また、元禄八年（一六九五）の年紀がある（二）木子文庫堀内家文書（木0011-2102）の柱間は現大仏殿、天平創建の大仏殿と同じであり、旧来の礎石位置を考慮した計画である。これ以降に礎石位置を踏まえていない独自の柱割をもつ新たな計画が提案されたとは考えにくい。よって大仏殿内建地割板図は少なくとも元禄八年（一六九五）以前の計画図であるといえる。公慶が勧進を願い出たのが貞享元年（一六八四）であり、これより先にこのように大規模で密度の高い図面を独自に

作成したとは考えにくい。よって板図は貞享元年（一六八四）から元禄八年（一六九五）の一年の間に描かれたといえることができるだろう。また、この一年の間に大仏殿再建計画図に関する記述は前述の元禄元年十二月九日中井主水が指図を完成させ寺から祝儀の項以外は見当たらず、よって大仏殿内建地割板図は元禄元年、中井主水による作成と考えてよいだろう。

この図に描かれている唐破風や、組物、装飾などの計画は①～⑦の諸図面を見ると分かるように、方広寺大仏殿の影響を受けたようである。基本計画は（二）（三）（四）木子文庫堀内家文書をはじめ、（五）大仏堂二百分一之図など一連の東大寺大仏殿再建計画全般において引き続き反映され、途中一一間から七間に縮小されるという大きな変更を経て、宝永五年の東大寺大仏殿完成に至ったと考えられる。

大仏殿内建地割板図と細部に至るまでの表現がよく似ている（四）木子文庫堀内家文書（木00211-02）であるが、板図に比べて高さは一〇尺低い約一六丈、大棟の長さは約四尺短い一四〇・五尺であり、上層の屋根勾配は近く、下層（裳腰）の屋根勾配はきつくなっている。軒の出は一〇二尺深く、軒高は三〇四尺低い。この図の縮尺が一／四〇であり、一尺の違いは図において約七・五cmとなることを考慮に入れると、（四）木子文庫堀内家文書（木00211-02）は大仏殿内建地割板図とは異なったプロポーシオンで描かれたといえる。

堀内家が中井家の下で棟梁を勤めていたこと（注18参照）、また架構まで考慮されていることを考え合わせると、（四）木子文庫堀内家文書（木00211-02）は平井氏が指摘しているが、方広寺大仏



殿を参考に、東大寺大仏殿再建のための雛形として描かれたと考えるのが妥当であろう。

(三) 木子文庫堀内家文書(木001-2-11)は多少簡略に描かれた図面であるが、高さは現大仏殿とほぼ同じ高さの約一五〇尺で、方杖が採用され架構の考慮がされている。(五) 大仏堂二百分一之図は柱間が旧礎石の位置と一致し、更に建地割図においては七間縮小案が提示されていて高さも一四三尺と低く、現大仏殿と似た印象を持つ。これらは大仏殿再建計画がある程度進んだ段階の図面であろう。

『東大寺金堂(大仏殿)修理工事報告書』において大仏殿内建地割板図の複製とされる一方で、『日本寺院史の研究 中世・近世編』では方広寺の図面として扱われている(六) 文化九年複製図/方広寺大仏殿であるが、板図とは柱間が異なり、また高さが一五尺以上高く、軒の出も三尺近く深い。この図の縮尺が一/一〇〇であることを考えると大きな差ではないかもしれないが、屋根勾配はかなりきつく、さらに細部を見比べると板図を複製したと言いがたい。また現段階では東大寺の図面であるのか方広寺の図面であるのかはつきりしない。したがって(六) 文化九年複製図/方広寺大仏殿の性格については再考する必要があるだろう。

その他、方広寺大仏殿の図面に関する個別の考察はここでは本題ではなく、種々の研究もされているので省略する。

## 七、結論

本稿では東大寺大仏殿内東壁に掲げてある板図について、現大仏

殿をはじめとする東大寺の史料、方広寺大仏殿の史料と比較し、また再建経過と照らし合わせることによってその史的位置付けを考察した。製作の由来や伝来の経緯も今のところ明らかではないが、大仏殿内建地割板図は従来言われていたように、『東大寺年中行事記』に記述されている元禄元年、中井主水による指図である可能性が非常に高くなった。

東大寺大仏殿が焼失してから一〇〇年以上経過したのち、公慶は勧進を願い出た。雨露にさらされる東大寺大仏像を見て勧進を志したという公慶の、創建・鎌倉期と同規模の大仏殿を再建しようという思いは並々ならぬものであったと想像できる。また図に描かれている唐破風や、組物、装飾などの計画は方広寺大仏殿から影響を受けたものであり、途中一一間から七間に縮小されるという大きな変更を経てもなお、板図における基本計画は後の東大寺大仏殿再建計画全般において強く反映され、宝永五年の東大寺大仏殿完成に至った。大仏殿内建地割板図は方広寺大仏殿の二度の建設と、修理を通じて発展した「大仏殿」建築の集大成ともいえる壮大でかつ壮麗な計画図であるといえよう。



(1) 本稿一、東大寺大仏殿内建地割板図（「東大寺のすべて」展における図面解説文）

(2) 天沼俊一『日本建築史要』飛鳥園、一九三一年改訂

(3) 山本栄吾「東大寺大仏殿の規模」（『南都仏教』第二号、南都仏教研究会、一九五五年）

(4) 『奈良六大寺大観 第九卷 東大寺二』岩波書店、一九七〇年

(5) 『国宝東大寺金堂（大仏殿）修理工事報告書』奈良県文化財保存事務所、一九八〇年

(6) 平井聖「東大寺大仏殿の宝永度造営について」（川上貢編『近世建築の生産組織と技術』中央公論美術出版、一九八四年）

(7) 現在の東大寺大仏殿の鴟尾は明治修理の際に取り付けられたものである（『東大寺金堂（大仏殿）修理工事報告書』）。

(8) 太田博太郎監修・内藤昌校注『注釈愚子見記』井上書院、一九八八年、三―四三頁。『愚子見記』の原文を読み下したもの。以下同じ。

(9) 『注釈愚子見記』三―四四頁

(10) 平岡定海『日本寺院史の研究 中世・近世編』吉川弘文館、一九八八年

(11) 『注釈愚子見記』四―五一―五五頁

(12) 伊藤要太郎編『匠明』鹿島研究所出版会、一九七一年

(13) 国立歴史民俗博物館編集・発行『古図に見る日本の建築』、一九八九年

(14) 日本建築学会編『日本建築史圖集』彰国社、一九七一年、第九版

(15) 谷直樹編『大工頭中井家建築指図集 中井家所蔵本』思文閣出版、二〇〇三年

(16) 内藤昌編・著『愚子見記の研究』井上書院、一九八八年

(17) 内藤昌・中村利則「ミヤコの変貌―聚楽第と大仏殿―」（『近世風俗図譜 第九卷 祭礼（二）』小学館、一九八二年）

(18) 木子文庫堀内家文書は、法隆寺大工の出身で幕府の京大工頭中井氏のもと、棟梁を務めていた堀内家に伝わった史料である。東大寺大仏殿の宝永度造営の棟梁を務めたのは堀内市郎右衛門正利であった。これに関しては注6平井論文に詳しい。

(19) 『東京都立中央図書館蔵木子文庫目録』東京都立中央図書館、一九九五年

(20) 伊藤要太郎『匠明五卷考』鹿島研究所出版会、一九七一年

# （付記）

本稿第一項は黒田、それ以外は石田の執筆である。

（いしだ りえ 神戸大学大学院）  
（くろだ りゅうじ 神戸大学助教授）

### 〔編集後記〕

本号に掲載される八篇の論考のうち三篇は館外からご寄稿いただきました。

神戸大学の黒田龍二氏と石田理恵氏には、東大寺大仏殿の江戸再建に関わる重要資料である建地割板図を、紹介をかねてご考察いただいております。当館では平成十四年度開催の特別展『大仏開眼一二五〇年 東大寺のすべて』に際し、神戸大学建築史研究室に同図の縮尺図の作製をお願いし会場に展示する機会を得ましたが、今回その成果を踏まえてご寄稿頂いた次第です。

韓国国立中央博物館の金有植氏と関内贊氏には、平成十五年三月八日に当館で行われた国際研究集会（平成十二～十四年度科学研究費助成金基盤研究（B）（2）『日本上代における仏像の荘嚴』の一環として開催）において研究発表をしていただいております、今回その発表内容に基づき執筆をお願いしました。（T）

### 〔編集〕

岩田 茂樹

谷口 耕生

### 〔英文翻訳〕

マイケル・ジャメンツ

奈良国立博物館研究紀要

## 鹿園雑集

第六号

平成十六年三月三十一日発行

編集発行

奈良国立博物館  
奈良市登大路町五〇番地

印刷

株式会社天理時報社  
天理市稲葉町八〇番地

# AN ARCHITECTURAL DRAWING OF THE DAIBUTSUDEN ON A WOODEN PANEL WITHIN THE HALL OF THE GREAT BUDDHA AT TÔDAIJI

ISHIDA Rie, KURODA Ryuji

Kobe University

On the eastern wall of the Great Buddha Hall (Daibutsuden) of Tōdaiji hangs a large architectural drawing on a wooden panel (3.28 m. in height by 5.98 m. in width). The existence of the hanging panel drawing has previously been recognized, but the surface of the panel has darkened, and can hardly be deciphered with the naked eye. The details of the panel drawing are revealed here for the first time. Sectional and elevation views of the Daibutsuden, which is eleven-by-seven bays with a central core structure (*moya*), measuring nine-by-five bays with a skirting pent roof (*mokoshi*), have been drawn on the panel at a reduced scale of one to twenty. The whole scale of the Daibutsuden in the panel drawing is identical to that of the Tenpyō era, but the spaces between the bays and the scale of their heights vary from the original. Its architectural style remains the Daibutsuyō. In order to situate the drawing in its historical context, I have assembled historical records and panel drawing of the Daibutsuden at Tōdaiji and of the Daibutsuden of the Hōkōji in Kyoto for comparison and considered the scales of the two Daibutsuden in these materials and the years of their creation. As a result, the panel drawing appears to be, as had previously been assumed, the first draft of the design of Nakai Mondo for the Edo-era reconstruction of the Tōdaiji Daibutsuden in Genroku1 (1688). The extant Daibutsuden has been reduced to seven bays in length, but the basic design seen in the panel is that used in the current Daibutsuden. Furthermore, the Tōdaiji Daibutsuden of the panel closely resembles various illustrations of the Hōkōji Daibutsuden in Kyoto. As the reverse side of the panel is yet to be investigated, the origin of its production and how it came to be in its present location are unclear.